

オ レ と 孝 一

— 主人公と自分の現在の姿を比べながら —

- (1) 主題名 基本的な生活習慣 [1 - (1)] 関連項目 [1 - (5)]
- (2) ねらい 節度を守り節制に心掛け調和のある生活の実現に努めようとする態度を養い、ひとつのことを地道に積み上げていくことが成果をだすための道であり、近道はないのだということに気付かせる。
- (3) 資料名 「オレと孝一」
- (4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点
導入	1 大きな夢を達成した人が、どのような道を歩んできたかを想像する。	この中で将来有名になる人がいると思いますか。 <ul style="list-style-type: none">君が甲子園に出るかもしれない実際プロになっている人は中学時代どんな生活をしていたと思いますか。才能があった生意気だったそっぽっかりやっていた小さい頃から始めていた	楽しい雰囲気をつくる。 自由に発言させた後、板書して本当に可能性があるのはどのへんかを考えさせる。 生徒の反応を予想し、切り返しを考えておく。(例:才能のない人は無理かな。勉強せずに練習ばかりで、もしプロになれなかったら?)
展開	2 資料の第1部分を読み「オレ」と「孝一」の人物像を考える。	ここまでで、「オレ」と「孝一」を比較して、表にまとめてみましょう。 「1年にやらせろ!」と「オレ」に言わされたのに、孝一が次の日からも同じようにしていたのはなぜでしょう。 <ul style="list-style-type: none">信念があったから1年に遠慮していたから全部が練習だと思っていたから	資料に書いてあること、思ったことを区別して整理し、まとめる。 体験などから考えたことを発表させるとよい。 自分ならどうするかも考えさせる。
開拓	3 資料の第2部分を読み、自分の考え方を持つ。 4 最後まで読み、孝一が一流の選手になった理由を考える。	「オレ」の考え方についてどう思うか、自分の考えを発表しましょう。 最後に「神様が不公平だからこうなったのではないとわかった」とあります、二人の人生は何が原因で違うものになってしまったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none">普段の生活に対する考え方かな自分に対する厳しさじゃないかな	班で話し合わせててもよい。お互いに少しずつ意見が違う部分を明確にさせる。 孝一がなぜ成果を出していったのか、生徒どうしの対話をしくみながら考えさせ、節度を守って生活することが安定や冷静さを生み出し、可能性を広げることに気付かせる。
終末	5 自分自身の生活を振り返る。	「オレ」と孝一の生活を参考に、自分自身の基本的な生活習慣についてもう一度考えてみましょう。	学級通信などで紹介し、さらに考えを深めさせる。

「オレと孝一」

【第一部】

中学二年の夏休み前に、孝一はオレたちのサッカー部に入ってきた。なんでも肩をこわして野球部をやめたらしかつた。同じ学年なのに、孝一のことはあまりよく知らなかつた。一年十三クラスもあつたのもひとつ的原因だが、孝一はおとなしくて、特徴といえば、学年で一番背が高いことくらいだつたからだ。

「今頃からサッカー始めても遅いんじゃないの。」とオレが言つと

「でもあいつ、身体はめっちゃ柔らかいんだぜ。バネがあるって“うか・・”と木下が答えた。木下は孝一と小学校が一緒だ。木下とオレは自分で言うのもなんだけど、サッカー部の中では実力的に群を抜いていた。よく練習を見に来ている女子も、だいたいはオレたち目当てだ。手を振ると歓声があがる。そういう時、三年生がにらむけど、悔しかつたら先輩もオレたちみたいに県選抜チームの候補に選ばれてみろつてこと。

顧問の先生は、孝一をゴールキーパーにした。先生や先輩に初步の初步から教えてもらった孝一は、一年生と同じように練習をした。最初は「サッカーを始めたばかりでめずらしいんだろうな。」と思っていたが、夏休みに入つて一年生の部員と打ち解けてきても、孝一はそれをやめなかつた。グラウンドに来るのは一番。片づけは最後まで。そういうのを見ているうちに、オレはなんとなく腹がたつてきた。

「孝一、お前一年なんだから、片づけなんかは一年にやらせろ！練習も一年が早く来て準備した後に行けばいいんだよ！」

孝一はちょっと驚いたような顔をしたけれど、何も言わずに笑つて、次の日からも同じことを続けていた。

【第二部分】

「なあ、木下は孝一のこと、どう思う？」オレはある日、木下に聞いてみた。

「どうつて？」

「なんか、やることがマジメつていうか、チマチマしててさあ。一年に遠慮し過ぎ。自分から後輩にあいつなんかすることないんだよ。なめられるじゃないか。しかもスパイクなんかもすごく丁寧に扱つたりして、オレ、見えてるとイライラする。」

「あいつは昔からマジメなんだ。あいつだって、中学生になつても近所のおばちゃんにするやつなんだよ。だからおとなしいのに、妙に友だちつていうか、知り合いが多いんだよな。それに、バイクは自分で稼いで買つてるから大切にするんじゃないの。あいつ、野球部やめた時に、サッカーにかわるんなら、部活の道具は新聞配達して自分で買えつて親に言わされたらしい。お金がどうこうじやなくて、なんか、孝一の家の親子のきまりみたいなもんで。」

「うわあ、オレなら絶対だめ。そんな朝早く起きられるわけないじゃん。親が子どもの部活の道具買うのはあたりまえのことだろ。あいつも反抗すればいいのになあ。たぶん気が弱いから言えないんだよな。」

「どうかなあ。あ、そう言えば、今度の県選抜の候補に、孝一も選ばれてるらしいね。」「でも、あいつ、声も小さいし・・キーパーはボール取れりゃいいってもんじやないよ。それに、あんなに周囲に遠慮してるようじやあ、ダメなんじやない。若いときは、メチャクチャなことしてたような人が、将来一流選手になるもんよ。世の中。」

三年になつてから、オレは孝一と同じクラスになつた。クラスでの孝一は、サッカー部での態度と同じだつた。いつも二コ二コしている、遅刻はない、そうじは一生懸命する勉強はする（たつた五分の朝学習でさえ目一杯やる）。合宿から帰つた次の日の授業で、オレは机の上でぐだつと寝ながら、背の高い孝一がシャキッとした姿勢で先生の話を聞いているのをボンヤリ見ていた。オレはサッカーで高校に行くから、勉強なんかどうでもいい。服装違反がどうとか言つても、これだけ何回も選抜の候補に選ばれているんだから、どこかの高校からスポーツ推薦で来てくれる声がかかるだろう。疲れてるんだから、遅刻もしかたない。そうじなんてムダムダ。文句言いながらでも、班のやつがやつてくれる。オレはムダなことはしない。孝一みたいに何もかもきちんとしてたら、スケールのでつかい選手にはなれないよ。

【第三部分】

そんなオレの予想に反して、孝一はどんどん力をつけていった。だんだん選抜候補に呼ばれなくなつたオレとは逆に、孝一は「候補」から「選抜チームの一員」になつていった。そして、ある日の練習試合で、人が変わつたような、かみつくような孝一の顔に、オレはドキッとした。そして、ゴール前からみんなに指示を出すその声は、相手のキーパーの何倍も大きく、自信に満ちていった。

三年生の夏休みが終わり、いきなり何もなくなつたオレは、放課後もグダグダするしかなかつた。期待していた推薦の話も、結局ひとつもこなかつた。いまさら勉強といつても、ちんぷんかんぶんだし、急に服装を直したり、そうじをマジメにするのもかつこわるいし、サッカー部のスターだつたオレは、いつのまにかクラスからも浮いていた。

「孝一、今度静岡である全国大会にも県代表で出るらしいな。高校も、ジャンジャン推薦で声がかかつてんだろうなあ。」オレは木下にぐちつた。

「K高校にするか、F高校にするか、迷つてるらしいよ。」

「え？あの有名なサッカーの監督のいるF高校はわかるけど、K高校つて、超えらいやつ

が行く高校だろ。サッカーと関係ないじゃん。」「あいつ、ぐんぐん成績上がつてて、今の調子ならK高校もバツチリらしいよ。サッカーでずっとやつていける人なんて、ほんの一握りだし、それなら勉強して大学に行く方を選ぼうか、迷つてると言つてた。」

「なんでそんなぜいたくな悩みなんだよ？あいつの方が後から始めたのに。サッカーやってた時間はオレの方が多いのに。神様が不公平なんだよ。」木下は黙つていた。

結局孝一は、F高校に進学した。全国大会の時の県代表監督が、F高校の監督さんで、いろいろ話をするうちに「この人について行こう」と決めたらしい。その大会で「優秀ゴーリーキーパー賞」を受賞したのが自信につながつたことも原因のひとつだつた。一方オレは、なんとか高校に進学したものの、サッカーを続ける気にはならなかつた。

五年後、テレビから孝一の名前が聞こえてきた。誰もが知つてているような有名な大学に進学した孝一は、その年のサッカー東アジア大会に日本代表として出ていたのだ。孝一のことだから、高校でもあの頃と同じように準備、片づけをし、道具を大切にし、勉強し、素直に周囲の言うことを聞いてどんどん実力をつけていったのだろう。そしてその二年後、オレは新聞で、孝一がリーガーになつた記事を見つけた。

オレと孝一。この年になつて、神様が不公平だからこうなつたのではないことが、オレにもわかるようになつた。

活用に生かすための実践報告

「オレと孝一」

1 主題の設定

生活習慣というものは、それぞれに基準が違い、他と比較して自分の生活が「節度ある」と言える程度のものなのかどうかもわかりにくいし、日々の生き方を変えるのは容易なことではない。また、学校生活の中で、こつこつと積み上げているものが将来のためにどれほど役に立つかわからず、易きに流れる傾向がある。

節度ある生活をするということは、自分自身の問題でありながら、他者の意見を受け容れ、周囲の状況を慮って生活するということでもある。節度ある生活をし、夢を実現した人の実例を資料として読ませ、中学生の時期から自分の生活習慣を見直させたい。自分の勝手な価値基準から、節度ある生活をするのはムダと思っている生徒にポイントをおいて指導すると効果的である。

2 指導過程の工夫

常に自分や、周囲の友達と重ね合わせて読んでいくようにしたい。特に、導入のところでは、日本全体や世界を相手にするような人でも、自分たちと同じように日々の生活というものがそこにあるという事実に思い至らせるような発問及び切り返し、写真の活用などがポイントである。

3 発問の工夫

授業の展開の中では、二人の人生は何が原因で違うものになったかを考えさせる発問が中心となる。ここで注意したいのは「『オレ』は努力をしなかったからだ」というところで生徒の考えが止まらないよう

にすることである。

「オレ」は努力をしなかったわけではない。ただ、練習だけ熱心にやればいいのではなく、自分を支えてくれている人との関係を保ち、どう生きるか考えながら生活することが、自分自身の将来を豊かにするのだということを理解させるように、あくまでも「節度を守り、節制に心掛け、調和のある生活の実現に努める」という道徳的価値項目に沿った発問の工夫が必要である。

4 生徒の反応（授業後の感想）

二人の人生の違いについては、「毎日コツコツやるという気持ちの持ち方」「いい加減な性格」「『何事も』という部分」「考え方の甘さ」「どれだけその競技を愛しているか」「心構え」「まじめさ」「誰もが認めるような努力」という意見が出た。また、「文章にはないが、孝一の性格からして、家に帰っても練習していたのだろう」というものもあった。

5 実践者からの一言

この資料のモデルとなった生徒は現在Jリーグの選手になっており、「お話」ではなく、実際に節度ある生活を積み重ねて、着実に力をつけていった人がいるということが生徒には大きく響いたようであった。生活の中の細かいことも丁寧に考えて行動するということの大しさを、本当の意味で感じられるのは、中学生としての経験を積み重ねた第2学年後半からではないだろうか。そういう時期にこの資料を活用するとよいと思う。

（高取北中学校 水登伸子）